

阿嘉島の蝶 Part15

ウラナミシロチョウの生態

上林 利寛
AMSL 調理担当

Butterflies in Akajima Island, Part15:
Ecology of *Catopsilia pyranthe* (Linnaeus)

T. Kamibayashi
E-mail: kamibayashi@amsl.or.jp

ウラナミシロチョウ(シロチョウ科 モンキチョウ亜科)は、主に東洋熱帯域に広く分布する蝶で、元々、国内では八重山諸島が生息地の北限でした。しかし、近年は沖縄本島と阿嘉島でも、南方から飛来したものが、長期にわたり繁殖しています。

2009年7月10日、那覇市の国際通りにほど近い公園で、飛翔する一頭のウラナミシロチョウらしき蝶に初めて遭遇しました。ところが、動きが俊敏で、近縁のウスキシロチョウとの判別がなかったのですが、辺りを注意深く見渡してみると、花壇のランタナ(クマツツラ科)の花に訪れる個体と、葉に静止した雌雄の交尾個体(写真1)が目にとまり、本種の名前の由来となった

裏翅の「さざ波模様」を確認して、特定することができました。

一方、阿嘉島では、2013年11月19日、北浜(ニシハマ)近くの草地で、鮮やかな黄色い花をつけたアメリカセンナ(マメ科)(写真2)に見惚れて足を止めていました。暫くして辺りを見渡すと、近くのオオハマボウ(アオイ科)の木の葉に静止している一頭のウラナミシロチョウの成虫を発見しました。そこで、もう一度アメリカセンナに目を凝らすと、新芽や葉上の幾つかに産み付けられた複数の卵と数匹の幼虫が観察でき、撮影しました。これらは、「モンキチョウ亜科」の類に見られる紡錘形の卵(写真3)と、幼虫がいわゆる「青虫」(写



写真1 ウラナミシロチョウ(夏型)成虫の交尾(上♂、下♀)

発生時期によって成虫の翅の大きさや色合いに変異があり、夏型、秋型と区別されている。この季節変異が知られる以前の図鑑では、夏型をウラナミシロチョウ、秋型をミズアオシロチョウとして別種扱いをしていた。



写真2 アメリカセンナ(マメ科)

北米原産の常緑小低木で、阿嘉島では観賞樹として庭や鉢に植栽されているが、一部が逸出して野生化している。晩春から初冬までの長い間、黄色い可憐な花を楽しむことができる。



写真 3 アメリカセンナの葉に産み付けられた、ウラナミシロチョウの卵



写真 4 アメリカセンナの小株に付く、ウラナミシロチョウの3匹の幼虫



写真 5 ウラナミシロチョウの蛹（2013年11月24日 飼育）



写真 6 ウラナミシロチョウ 秋型(♀?)の成虫（2013年12月12日 飼育）

秋型の翅の地色は淡黄色で夏型は白色。夏型、秋型共に、裏翅に淡褐色のさざ波模様の地紋があり、秋型の方が濃い。また、秋型の裏翅には桃色に縁取られた銀紋があり、翅縁や触角も桃色になるが、夏型にはこれらの特徴は無い。

真 4)であることからウラナミシロチョウと推測し、後に図鑑の写真と照らし合わせて同定しました。また、所有するどの図鑑にも、アメリカセンナがウラナミシロチョウの幼虫期の食樹だという記述はありませんでしたが、最新のインターネット上の情報では示されていました。

その後、ウェブサイトや図鑑を参考にして、那覇市の公園では園内に植栽されたナンバンサイカチ(マメ科)が幼虫期の食樹であろうと推測していましたが、やっと、2014年11月28日、ナンバンサイカチの葉に開いた食痕をたよりに、葉上で一匹のウラナミシロチョウの終齢幼虫を見出すことができ、改めてナンバンサイカチが食樹であることと沖縄本島での繁殖を確認できました。

現在、阿嘉島を含む沖縄諸島では、ウラナミシロチョウの他に、ツمامラサキマダラ、クロマダラソテツジミなどの、一昔、二昔前までは南国からの「迷蝶」扱いだった種が、年により増減はあるものの、途絶えることなく定着しています。この分布域拡大の現象は、昨今の地球温暖化が関係していて、以前は、冬季の気温の低下によって死滅していた蝶が暖冬で生き残るようになり、繁殖し続けたことに主因があると考えられています。また、日本各地で、気候の温暖化に伴う暖地性の蝶たちの北上による分布拡大により、在来種との競合の心配もあり、殊に寒冷な高地以外には生きられない高山蝶たちの生息地の消失などを考えると、彼らの行く末が危ぶまれます。